

三重大学高等教育デザイン・推進機構の各種成果、取組をお伝えします。

目次

○全学共通教育センター

「英語による授業(Study in English)」を通じた国際交流……………1

○全学資格プログラムセンター

全学教職課程ガイダンスと三重県教育委員会による説明会の開催……………2

○高等教育開発デザイン・IRセンター

令和5年度全国大学教育研究センター等協議会参加報告……………3

令和5年度全学FD・SD「日本の大学における教員の教育業績に対する評価」(11月29日開催)……………4

○アドミッションセンター

学問探究セミナーにおける新たなチャレンジの実践……………5

発行日

2024年3月14日

編集担当

鄭 漢模

(高等教育デザイン・推進機構 講師)



「英語による授業(Study in English)」を通じた国際交流

全学共通教育センターでは、外国人教員が担当する英語で行われる授業や海外語学研修、国際交流イベントを総称してSIE(Study In English)という実践的な語学力の向上と国際交流を促進する活動に取り組んでいます。

全学共通教育センターで開講されている英語による授業は、TOEIC500点以上相当の語学レベルとTOEIC600点以上相当の語学レベルという二つのレベルの授業が開講されており、学生の語学力に対応した多様な授業が展開されています。前後期それぞれ18の授業があり、学期中に開講される講義に加え、後期には集中講義「国際理解実践1」において英国シェフィールド大学で3週間の語学研修が行われる予定です。これらの授業では、英語のみの環境で学習することにより、学生の実践的な英語運用能力の向上だけではなく、異文化に対する興味関心や理解の向上、そして、広い視野の獲得を目指しています。

これらの授業に加え、課外時間(昼休みや授業後の時間帯)には様々な国際交流イ

ベントも開催しています。年間12回(月に1～2回程度)開催されるイベントを通して、国籍や立場を超えた、多様な背景を持つ人々とのコミュニケーションの機会を提供しています。

今年度、これまでに開催したイベントには5人から50人程度の学生が参加しました。各イベントには日本人学生の他、多くの外国人留学生も参加しており、10～15の国籍の学生が参加したイベントもありました。イベントの内容は毎回異なっており、例えば、ゲームなどを楽しみながら英語表現について学んだり、英語による効果的なプレゼンテーションの方法について学んだりするなど、語学力の向上を主な目的としたものもあれば、参加者で多国籍チームを編成して問題解決に挑戦するなど、グループでの活動を通して異文化理解を促進することを主な目的としたイベント、そして、音楽や映画などの共通の関心事を共有することによる仲間づくりを主な目的としたイベント、さらに、1月には石川県震災義援金チャリティーコンサートを開催し、国籍や言語・文化の垣根を超えて一つの目的

に取り組んだイベントもありました。このチャリティーコンサートには14の国籍から成る学生や教員35名が参加し、参加者からは、音楽、ダンス、マジック、カンフーの7つのパフォーマンスが披露されました。また、このイベントを通じて石川県に義援金を募った結果、5万円の寄付を行うなど、それぞれの文化的背景や立場を超えて協力し合う有意義な機会となりました。

いずれのイベントにおいても、リラックスした雰囲気の中で会話を楽しみながら、国籍や文化を超えた学生間のつながりを作るとともに、心に残る共通の思い出を作る機会を

提供することができました。今後は、キャンパス内に国際交流の輪が広がっていくことを目指し、引き続き、継続して取り組んでいく計画です。なお、国際交流イベントについては三重大学国際化推進活動支援に関する予算、海外語学研修については三重大学国際交流事業からそれぞれ助成を受け実現することができました。大学からのいただいた予算を有効に活用しつつ、今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

全学共通教育センター

サコラヴスキー・ジェシー、下村 智子

全学教職課程ガイダンスと三重県教育委員会による説明会の開催

全学資格プログラムセンターが担う事項の一つに、人文・生物資源・工の3つの学部を設置された教職課程(以下、全学教職課程)のプログラムの拡充及び質保証があります。今回は、2023年9月29日に開催した全学教職課程ガイダンスと三重県教育委員会による説明会についてご報告します。

全学教職課程では、4月と9月の年に2回、上記の3つの学部で教職課程を履修する学生全員を対象としたガイダンスを実施しています。ガイダンスでは、学生が履修の履歴を記録する「学びのあしあと」の記入指導のほか、テーマについてグループで意見交換を行う活動などを実践することを通して、学部を超えた仲間づくりや教職課程の履修に向けた意識の向上を目指しています。

9月29日に開催したガイダンスでは、1年生と2年生以上に分けて実施しました。9月に実施するガイダンスは、1年生にとって初めて参加するガイダンスとなるため、全学教職課程やガイダンスの目的などの基本的な説明に加え、後期より記入を開始する「学びのあしあと」の説明を行いました。

2年生以上を対象とするガイダンスでは、

「学びのあしあと」記入上の注意事項について伝えた後、グループに分かれ、教員として活躍している卒業生のインタビュー動画を題材に、学生は、自身の教職課程を目指すきっかけや教師という仕事に対する魅力について改めて考え、グループで共有しました。卒業生からは、教師を目指したきっかけや在学中に取り組んだ活動、現在の仕事の内容を紹介していただくと共に、教職について、「多忙な中にも生徒や自分自身の成長を実感できる仕事」、また、「人の将来や人生に大きく関わることのできる仕事」としての魅力について語っていただきました。学生の中には、動画の内容と自身の考えとの共通点を見出し、学修に向けたモチベーションの維持や向上に結びつけた学生も見られました。動画の最後には、教職課程を履修する学生に対する激励の言葉をいただき、学生にとっては新学期からの授業に向けて、気持ちを新たにできる機会となるだけでなく、教職という仕事そのものについて改めて考え、それに向かう自身の姿勢について振り返る貴重な機会となりました。

さらに今回は、ガイダンスの後に三重県教育

委員会教職員課の鈴木良典様より、近年の教員の働き方改革に対する取り組みや教員採用試験などについてご説明いただき、約40名の学生が参加しました。教育委員会の方から三重県の現状について直接聞くことにより、将来の職業選択についてこれまで以上に現実的・具体的に考える契機になりました。

全学教職課程では、毎年、数名ではありません

すが、県内外の中・高等学校へ教員を輩出しています。今後も、卒業生や教育委員会など学外の関係者とも連携しつつ、在学生の学びを支えて参ります。

全学資格プログラムセンター

下村 智子

令和5年度全国大学教育研究センター等 協議会参加報告

8月24日・25日、令和5年度全国大学教育研究センター等協議会が広島大学で開催されました。今回の全体テーマは「大学における人材育成と地域共創—その現状と課題—」で、人材育成における地域共創をどのように考えていく必要があるのか、大学にはどのような役割が期待されているのかなどについて、参加大学とともに情報交換し、各大学が直面している課題や解決策について共有しました。

1日目は、新潟大学人文社会科学系・経済学系列(創生学部)の堀籠崇准教授から、「大学における人材育成と共創」をテーマに基調講演がありました。テクノロジーのもたらす恩恵に浴し、人々にとって新たな価値へと結びつけていくためには、地域内外の多岐にわたるセクター、ステークホルダーを巻き込んだ「共創」(科学技術振興機構、2023)が求められていること。このような背景において、これからの時代の高等教育には、①リアル/バーチャルを効果的に活用し、②共創的な場の形成により、③地域社会を足場とした「グローカル」な価値の再創造を生み出し、④学際的な視角から課題解決に導くこと、すなわち地域を基盤とした学際的共創教育が求められている、ことを強調されていました。基調講演に続き、代表校である富山大学、金沢大学、三重大学、長崎大学から、各大学における地域共創の事例の報告がありました。本学からは下村が、主に三重創生ファ

ンタジスタ養成プログラムについて、成果と課題を交えて報告いたしました。

2日目は、「有効なオンライン授業の方法」、「文理融合による教育の意義」、「教育の質とは何か？大学は何を保証しなければならないのか？」、「自律的学習者を育てるための学習支援の方法・担い手・組織体制」、「生成 AIの教育への展開の利点と課題」の5つのテーマが設けられ、参加者が事前に申し込んだテーマに分かれてグループで議論を行いました。我々の参加したテーマ「文理融合による教育の意義」においては、カリキュラムにおける文理融合なのか・学生個人の中での文理融合なのかという、前提として検討しなくてはならない課題について議論したり、今後の文理融合教育のあり方として、科目の寄せ集めやオムニバスなどでは意味がなく、カリキュラムの明確な位置づけが必要である、履修指導・支援に向けた文理の多様な分野のアドバイザーが必要であるなど、重要なアイデアを学ぶことができた2日間となりました。

高等教育開発デザイン・IRセンター
長濱 文与、下村 智子

令和5年度全学FD・SD「日本の大学における教員の教育業績に対する評価」(11月29日開催)

平成20年の答申「学士課程教育の構築に向けて」(中央教育審議会)では、教員の人事・採用にあたっての業績評価について、教育面を一層重視することが強調されました。そこで、本学では、山梨大学教授 日永 龍彦氏を講師としてお招きし、日本の大学における教育業績評価についてご講演いただいた。本FD・SDはハイブリッド形式で開催され、参加者数は80人(対面37人、オンライン43人)でした。県内の他大学からも11人の参加者がありました。

講演では主に、教育業績評価に関する政策、歴史的な観点から、大学基準・大学設置基準における教員の資格、審議会答申における教育業績評価の変遷、認証評価における教員の業績評価、大学教育関連学会における教員の業績評価に関する議論、日永氏が所属する山梨大学での実践から考える教育業績評価ツールの課題など、大きく5つの話題が取り上げられました。

日永氏は、教育業績評価を公正に処遇に結びつけるために必要な比較可能な評価ツールは開発されつつあるものの、評価する側、される側の業務量が膨大なものになり手出しにくい状況にあることから、評価業務を専門とする組織を整備することを提案しました。また、公正な教員評価を行うために、米国の小中等教育段階において導入が進められているティーチングスタンダードといった職位や経験ごとの評価基準の開発が考えられるとしました。最後に、こういった教育

業績評価に関する取組は、何よりも目の前にいる学生のため、大学の存続のためにも質の高い教育の提供が必要というような意識の共有が改めて行われねばならないことを強調し、講演を締めくくりました。

質疑応答においては、日本国内にティーチングスタンダードのような事例の紹介を求める質問については、日永氏は管見の限り日本での事例は不十分であると答えました。また、保育、介護など、ライフイベントに対する考慮の必要性に関する質問に対し、制度設計の段階から日常的に時間が制約される状況に置かれる教員のことを配慮する必要があると回答しました。

本FD・SDについてアンケート調査を実施した結果、回答者数49人のうち、約94%が満足を示しました。講演の内容については、「素晴らしい企画だと思った」、「今まで、このような内容のセミナー拝聴したことがないので、新鮮に思った」といったポジティブな意見があった一方で、「実際にあのお話を本学ですぐに取り入れるのかは大変難しい」、「より多くの教員に参加してもらいたかったが、周知では本 FD・SDの魅力が十分に伝わらなかった」との意見もありました。さらに、次の開催に向けては、「ワークショップ形式のような実践的な形式にしてほしい」といった声がありました。

高等教育開発デザイン・IRセンター
鄭 漢模



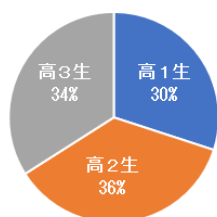
学問探究セミナーにおける新たなチャレンジの実践

「学問探究セミナー」は、高大接続の一環として、高校生が大学の授業で学べることを実際に体験できる講座です。従来、毎年夏に開催してきた三重大学高大連携「サマーセミナー」を、令和5年度より「学問探究セミナー」にリニューアルし、昨年度15講座（対面12、オンライン3）を、今年度は各学部の協力もあり、講座数を27講座（対面17、オンライン7、対面とオンラインのハイブリッド3）まで増やすことが出来ました。今回は、その中の2講座「グローバル・チャレンジ」「アカデミック・チャレンジ」による新たなチャレンジを紹介します。この2講座の共通点は、対面とZoomのハイブリッド開催の点と、事前課題の提出を条件としている点です。「グローバル・チャレンジ—三重の魅力を英語でプレゼンしよう！—」は、昨年度「三重の魅力を英語でプレゼンしよう！」で開催したセミナー名を改称し、国際交流センター教員が中心となり、外国人学生4名（ブルガリアとベナンの大学院生、ドイツとブラジルの学部生）の協力を得て、実施されました。高校生には、オンライン事前説明会でZoomの接続確認と事前課題の説明のあと、事前課題のオンライン掲示板への英語による三重の魅力の書き込みのあと、その書き込みをもとにセミナー当日に英語でプレゼンテーションしてもらいました。当日は対面6名・オンライン（Zoom）2名の計8名の三重県内の高校生が参加し、受講後のアンケートでは、「外国人学生の方と

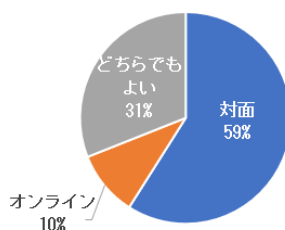
話す機会や、その国のことについて学ぶきっかけになったので良い経験になりました。また、プレゼンテーションを通して三重の魅力の再確認、人へ伝える力の練習ができて良かったです。」など、満足度の高いコメントが得られました。

「アカデミック・チャレンジ—「本気で」研究テーマを決定しよう！—」は、高校で実施されている探究的な活動（自分で課題を設定し、解決策を考え、提案する等）に高校生が取り組むにあたり、研究テーマをどうやって決めたら良いかがわからない高校生が多いことから、共通教育センター教員が中心となり、今回のセミナーを今年度初めて開催することになりました。高校生には、オンライン事前説明会でZoomの接続確認と事前課題の説明で学問分野の構造やキーワードを具体的なテーマにする方法の解説を聞いてもらった上で、実際に自分が設定したキーワードを深めたテーマをワークシートに書き込んでもらいました。当日はそのワークシート（スライド）を投影・共有しながら、参加者同士による意見交換も行った上で、ブラッシュアップしたテーマをプレゼンテーションしてもらいました。当日は対面1名（三重県）・オンライン（Zoom）1名（愛知県）の高校生が参加し、受講後のアンケートでは、「研究テーマをどうやって決定し具体化していくのか知ることができました。詳しく丁寧に説明してくださったのでとてもわかりやすかったです。質問にも的

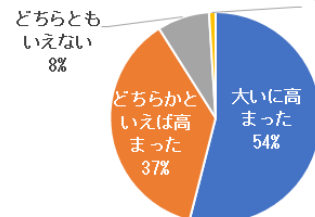
Q:参加高校生の学年



Q:希望する開講形式



Q:セミナー受講後の三重大学進学への関心
どちらかといえば高まらなかった 1%



（出典：上記グラフは「令和5年度 学問探究セミナーアンケート結果」（回答数346件）より）

確に答えていただきありがとうございました。
三重大で学びたいという気持ちがさらにい
っそう強くなりました。」といったコメントが得
られました。

今回紹介の2講座のほかにも特色ある講
座が対面やオンラインで開催され、「学問探

求セミナー」全受講者(486名)のうちアンケ
ート回答者(346名)の91%(313名)が本学
進学への関心が高まったと回答しています。

アドミッションセンター
宮下伊吉

編集後記

ニュースレター第63号をお届けします。お忙しい中、ご寄稿頂きました先生方にお礼を申し
上げます。私は昨年末に本学のT課長にお声掛け頂き、三重大大学駅伝大会に参加する機会
を頂きました。私が参加したチームには、教員(鄭)の以外にも、職員、日本人学生、留学生
が所属していました。まだ入職して以来経歴の浅い私ですが、このような様々な立場の構成
員がワン・チームとなり楽しく参加できるイベントは経験したことがありません。そこで私は、
本学の強みは「コミュニケーション」にあるかもしれないと思いました。つまり、ワン・キャンパ
スという恵まれた環境の中で、各構成員間の距離感が非常に近く常に意思疎通でき、目標
に向けて一丸となって頑張れるのです。そして本誌も、そういった「コミュニケーション」の一角
を担ってきた、大切な伝統であると考えています。私が編集を担当していた間、本誌を通し
て、一人でも多くの構成員に、大学のシステムは勝手に動いているものではなくそこには本
学の教職員の皆様の日々の努力があったこと、本学でこのような面白いことが起こっている
ということが認識されるようになったことを心から願っております。



第15回 三重大大学駅伝大会 2023年12月2日(土)
チーム「Go! Go! TOMI-chans」 39位/41チーム



(高等教育開発デザイン・IRセンター 専任講師 鄭漢模)

本ニュースレターに関してご意見・ご感想等がございましたら、下記までお気軽にご連絡ください。

e-mail: kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp

過去のニュースレター: <https://www.hedp.mie-u.ac.jp/publications/news-letter.html>